

記憶のなかのニューヨーク

今村保雄

## 目次

はじめに-----	2
一 ミスト (Mist) -----	3
二 あいさつ (Greetings) -----	5
三 ボーダーズ (Borders) -----	7
四 ビーライン (Bee Line) -----	9
五 迷う (Lost) -----	12
六 私の息子 (My boy) -----	14
七 フレッシュキルズ (Freshkills) -----	18
八 ワールドトレードセンター (World Trade Center) -----	22
九 神、扉閉じ給う時、窓開け給う (When God Closes a Door, He Opens a Window.) -----	29
十 お帰りなさい (Welcome back!) -----	35
あとがき-----	37



Blueman Theater (Astor Place)

はじめに

私は、平成十年（一九九八年）三月から、平成十二年（二〇〇〇年）六月まで、ニューヨークに駐在し、東京都・ニューヨーク市姉妹都市交流に関する業務に従事した。年齢はまだ四〇歳前であり、心身ともに充実した時期であった。

その後ちように帰任の時期に、東京都は財政難に見舞われ、多くの事業が廃止された。ワールドトレードセンターにあった事務所も閉鎖され、現地から東京都の姿は消えた。今なお姉妹都市の絆は、関係者の懸命な努力により継続しているが、日常的な行き来は出来なくなった。やむを得ないが、残念なことであった。

この小文集は、すでに二十年以上が経過して、私自身も東京都庁を定年退職した現在、現地での仕事やぐらし、交友関係のなかで、印象的な記憶として残っているものを文章としてまとめたものである。

思うに、ニューヨークに住み働き、自分に生じた一番大きな変化は何だったかといえは、それは感情が豊かになったということである。当時、友人が言っていた。この街は、人をエモーショナルにさせると。私も二年少しの短い滞在期間を過ごすうちに、そのことを理解することになった。

人間の記憶は都合良く出来ている。佳きことのみが残り、磨かれてさらに美しくなって残る。だから、ここに記すことは、キラリと輝く想い出だけである。では、始めよう。

## 一 ハスト (Mist)

私がニューヨークに着いたのは、平成十年（一九九八年）の三月中旬であった。正式な任期は四月からだが、引き継ぎや挨拶回り、また生活上のことも伝えたいという前任者のOさんの親切心から、二週間程度、早めに着任させてもらったのである。国際便で太平洋を横断するのは生まれて初めてであったので、搭乗して離陸するまではかなり緊張した。しかし航空会社は日本航空、当時は花形のジャンボジェットで、一旦空に舞い上がればほとんど揺れを感じることもなく、安心して過ごすことが出来た。当時はまだ申し出れば機内で喫煙も可能で、前方のファーストクラスの席に案内されて、しばし紫煙を燻らす贅沢も味わえた。

そのようなリラックスした私を迎えたのは、残雪が目立つジョン・F・ケネディ空港だった。到着は、概ね午前十一時頃であったろうか。気温は摂氏マイナス二度くらいだったように思う。東京とは十度くらいの温度差があったので、覚悟はしていたが、冷たい空気がダウンジャケットを通して

肌に突き刺さってきた。

○さんは空港まで出迎えに来てくれていた。自宅に向かい、周辺を車で案内してもらった。

寒いことには耐性があったが、参ったのは湿度の低さである。湿度計を見ると二十％程度しかない。息苦しさを感じるくらいであった。

さらに辛いのが就寝時であった。鼻腔、口腔、全てが乾燥し、夜中になんども顔を洗った。水も水道水は硬水なのでそのままでは飲むことはできない。昼間にうっかり自分自身の飲み物を買うことも忘れていた。ちなみに、ニューヨークでは自動販売機はほとんどみかけない。

加湿器はあった。しかしそれは、加熱して蒸気を放出するという私たち日本人にとって見慣れたものではなく、水がミストとして噴霧されるものであった。乾きが緩和される実感はなく、また寒さもそのままであった。私は、早速加熱式のものを購入したが、○さんは、この点については「無い」とにべもない。なので、泣く泣く購入は諦めた（ほかの人に言われて、調べて加熱式が割と容易く購入できることを発見したのは四月初旬であった）。

私のニューヨーク生活の幕開けは、乾燥と、ミストであった。

早く暖かくなれ。いや、なっってください。そう祈りながらの、新生活の始まりであった。

## 二 あいさつ (Greetings)

四月を前に、Oさんは私をあいさつ回りに連れていってくれた。ご自身の離任のごあいさつも必要であった。私たちは、日系人会、総領事館、商工会議所などの日系コミュニティの機関や団体、そしてニューヨーク市役所の関連部署、ニューヨーク&ニュージャージー・ポートオーソリテイなどの現地の機関などを順次回っていった。

印象的であったのは、ニューヨーク市の関連団体である「ニューヨーク市姉妹都市プログラム (The Sister City Program of the City of New York, Inc.)」を訪れたときのことである。ニューヨーク市役所の各部署は、主にロワーマンハッタンの庁舎に置かれているのだが、この団体は、国連本部に近い民間ビルのなかにあった。世界中の国や都市から多くの公的なミッションが訪問するニューヨーク市として、その便宜を図るために設立されたからである。

到着したときは、丁度会議中で、主だったメンバーが揃っていた。Oさんが予めアポイントを入れておいて、全員が揃うこのタイミングで引き合わせてくれることになっていたのである。

初めてお会いする方々の表情は誰もが笑顔で、礼儀正しく迎えてくれた。決して広くはないが心地よい会議室に、プレジデントでアイリッシュアメリカンのテレサさん、ディレクターでアフリカ

ンアメリカンのヘンリエッタさんをはじめとして、アングロサクソン、ジュイイツシュ、チャイニーズと多くの民族の幹部職員の皆さんが勢揃いしていた。そして半分以上は女性であった。当時の東京では、今のよう「多様性 (diversity)」という言葉は聞く機会はそう多くはなかったが、ニューヨーク市のこの会議室の風景は、まさにその言葉を体現していた。

決して流暢とはいえない私の英語ではあったが、これまでの仕事のこと、今回の仕事に関する思いなどを一所懸命話した。その場にいた方々、特にテレサさんとヘンリエッタさんは、真剣に耳を傾けてくださった。また私にも聞き取りやすくゆつくりと、質問もしてくれた。緊張したが、嬉しいひとときであった。

伝えたいことが無いところにはコミュニケーションは存在し得ない。だが、何かをきちんと伝えたいと思うとき、言語の壁はあっても、必ずや相手に伝わるものである。だからこそ、さらにその壁を低くするために、語学を学ぶという努力を怠ってはならないと思う。

ニューヨークカーは、頑張っている人は尊重し、自然に寄り添って励ます。そしてその人が何かを成し遂げたとき、惜しみなく賞賛する。どんなにささやかなことであっても。

### 三 ボーダース (Borders)

ボーダースという名前を聞かなくなって久しい。いや、日本人で覚えている人はもうほとんどいないかもしれない。かつてアメリカに存在した、大型書店(メガストア)の名前である。二〇一一年に経営破綻してしまって、今はない。

この名前は、私にニューヨークを思い出させる。ボーダースの店舗の一つが、二〇〇一年九月十日まで、ワールドトレードセンターの一階にあったからである。

ニューヨークで働いていた時、書店に行つて、本をあれこれ探するのが楽しみであった。なかには、ゆったりと座つて本を読みながらコーヒーを飲むスペースを用意してある店舗もあった。

このボーダースには、仕事の帰りによく立ち寄つた。手軽なペーパーバック、美しい装幀の写真集や美術書、無数にある雑誌、いかめしいハードカバーの社会科学の専門書などが、とてつもなく広い店内に、ところ狭しと並べられていた。

私が当時一番惹かれたのは、ニューヨーク市の歴史に関する本であった。歴史の分野だけでも数え切れないほどの本が書棚に並べられており、いつもお目当ての一冊を見つけるために、多大なエネルギーを消費しなければならなかったが、それもまた楽しかった。移民、ブルックリンブリッジ、

エンパイアステートビル、ワールドトレードセンター、ブロードウェイ、五番街、ジャズ、ジャッキ  
ー・ロビンソン、地下鉄。数々のニューヨークに関するストーリーを、書店で彷徨することで少しは  
学ぶことができたように思う。

一方、比較的気楽に読めるミステリーやハードボイルド小説も好きだった。アガサ・クリステイ、  
レイモンド・チャンドラー、ジョン・グリシャム、エド・マクベインなどの作品を洋書で読み始めた  
のもこのころだった。

ある日、私は「オリエント急行殺人事件」のオーディオ版（カセットテープ二巻）をボーダースで  
購入した。ヒアリング力が弱いので、少しでも向上させたいと思って、教材を探したのである。ま  
た、まるつきり知らない作品では歯が立たない。そこで前から親しんでいる（あくまで和訳版だが）  
作品の中から選んだのである。

店のレジカウントーはこれも壮大であった。二十台以上のレジが並び、客待ち列の先頭から「ネ  
クストプリーズ！」と大きな掛け声が聞こえると、そこへ本を抱えた人たちが順次吸い込まれてい  
く。一人一人前が空いて行列が詰まっていくのは、これまた結構緊張するものだ。私の番になった。

私が向かったレジでは、若い男性の店員が待っていた。彼はとても知的でお洒落なアフリカンア  
メリカンの青年だった。

彼は、にこりとして「これは楽しい作品です。良い買い物をしましたね。」と語りかけてきた。「初めてニューヨークに来たのですか？きつとすぐに、素敵なニューヨーカーになれますよ」とも言うてくれた。

お世辞もあったろうが、おそらく彼の父母か祖父母も、ニューヨークに渡ってきたのだろう。だから仲間としての感覚を持って私に話をしてくれたのだと思う。ささやかな、その場限りの友情。だがそれは、クレジットカードのスワイプ (swipe) を超えたところにある。

彼は、元気だろうか。時々、思いを馳せる。

#### 四 ビーライン (Bee Line)

私の前任者Oさんは、都で借り上げた住宅に住んでいたもので、私もそこを引き継いで住むことになった。ニューヨーク市域外の北方にあるウエストチェスター郡 (Westchester County) のスカースデール (Scarsdale) という町にあった。閑静で、比較的裕福な人々が住む緑豊かな地域であった。

そこから、マンハッタンの南端にある職場に通う二つの方法があった。一つは、MTA (Metropolitan Transportation Authority) が経営する、メトロノース鉄道 (Metro North) のハーレム線 (Harlem

Line)という近郊鉄道に乗り、グランドセントラル駅(Grand Central Station)で地下鉄に乗り換え、ワールドトレードセンターの真下にある駅で降りる方法。もう一つは、ウエストチェスター郡の交通部が運営するバス、ビーライン(Bee Line)のブロンクハットタンまで行き、二十六丁目(26th Street)で地下鉄に乗り換える方法。しばらく両方を試して比べてみたのだが、家の近くにバス停があったことが決め手になり、バスで通勤することになった。

バス停の横には銀行があり、午前七時前にバス停にいと、開店前の銀行の敷地を、毎朝一人の女性が制服を着て清掃をしていた。なんとなく挨拶をしてから話をするようになった。アルゼンチンの出身で、家族でニューヨークに来たらしい。娘さんはこちらの学校を出て獣医として働いているとのこと。ニューヨークでは獣医の社会における地位は高い。彼女も、人のために働いて認められている娘さんのことをとても誇りにしていた。途中からは、娘さんたち家族の写真も見せてくれるようになった。いつも胸ポケットに入れていた。しまいには話に花が咲きすぎて、危うくバスに乗り遅れそうなこともあった。誇り高く仕事をする立派な労働者だった。

往路のバスの車内は、これから仕事ということで良い意味での緊張感に満ちていた。座席は割と広く(大きな体格の人が多いたためであろうか。これは近郊鉄道も同じである)、ラップトップコンピュータを広げて仕事をする人もいた(ちなみに、アメリカではノートパソコンというものは無い。

日本でノートパソコンというものをラップトップコンピューターという)。

話が逸れたが、往路で居眠りをする乗客はほとんどいない。雑談する人もいない。

それに比べて復路のバスは雰囲気違っていい。結構往路と同じ乗客と出くわすのだが、雑談をする人もいれば、居眠りをする人もいる。仕事をしている人はまず見かけない。

ドライバーは職人気質の人が多かった。長距離の大型バス (Coach) なので、運転に神経を使う。時折、途中のバス停がない区間でルートを変えて、比較的すいていると思しき道を選んでいったこともあった。当時はまだ混雑地点を表すシステムなどはない。おそらく仲間との無線連絡で情報を得ていたのだろう。

赴任した一九九八年の十二月の帰り道、そろそろクリスマスシーズンで、車内もどことなく華やいだ雰囲気だった。突然、停留所もないところで、バスは減速し、そして停車した。乗客はいぶかしみ、そして少しざわつき始めた。いったいなんだ？ (What is going on?)

その時である。突然「右手をご覧ください。ここが『美味しいチキンのお店の前』停留所です！ (Look at right side. Here is the Bus stop in front of Delicious Chicken Store!)」とアナウンスが響き、プッシュとドアが開いた。慌てて乗客が何人か、買い物に降りていった。車内は爆笑の渦。いつも無口な髭のドライバーが、ニヤリとサムアップ (Thumb up) した。してやったり。

## 五 迷う (Lost)

マンハッタンでは基本的に道に迷わない。よく知られているように、南北を通るアベニュー (Avenue) と、東西に横たわるストリート (Street) が基盤の目となり、街区 (Block) を構成しているからだ。住所も、五番街 (Fifth Avenue) を中心として、ストリートごとに東西にそれぞれ番号を振っていく。ストリートの北側と南側は奇数、偶数で分けてある。アベニュー沿いにも、ダウンタウン側から若い番号で始まり、北上するにつれて番号が増えていく。実に合理的である。

ほかの四つの区 (Borough) では、斜めの交差もあるため、必ずしもマンハッタンのようにはつきりとはしていないが、通りごとに住所の番号を振っていくという規則性は同じである。従って、迷うことはそう多くない。

しかしそれでも、時には迷う。

まず、昼と夜。同じ場所であっても、全く異なる風景になる。夜は街灯が無いか、あっても暗い。日本人の使う蛍光灯をあまり見かけるとはなく、白熱灯が主流である。なめてかかるとえらい目に遭う。

もう一つは、当然かもしれないが、新参者 (New Comer) にとっては慣れていないし、顔見知り

もない地域である。そして治安が良いといってもアメリカは銃社会である。怖いという感覚を持つ。落ち着きをなくすだけで迷ってしまうことがある。

赴任した年、一九九八年の十月のある日、私は、職場から地下鉄に乗り、例によって二十六丁目で降りて、ビリージョエル (Billy Joel) のムービング・アウト (Movin' out) という歌をウォークマンで聴きながら、バス停で帰りの高速バスを待っていた。少しして、目の前に車がすっと止まった。四大家族で、お父さんが運転していた。ウィンドウがすると降りて、そのお父さんが「エンパイアステートビルに行くにはどう行ったらよいですか？」と尋ねてきた。地下鉄でチャイニーズにチャイナタウンへの行き方を聞かれた経験はあるが、自家用車の運転手に聞かれたのは初めてである。持ち歩いていた地図を鞆から取り出して、説明を始めた。ふむふむ、とやり取りをしていて、気がついたら、いつの間にか回りに三人の男が集まっていた。私と運転手のやり取りの途中で一人が、うるさく口を挟むようになった。私は説明を続けたのだが、ほかの二人も口出しするようになった。さらに、三人同士でいや違う、俺の方が正しい、と言い合いをするようになった。そのうち、人が増えて、人だかりができてしまった。みなめいめに勝手に話をしている。近くに警察官はいたが、見て見ぬふりをして素通りしていった。

運転手は、諦めたのか「みんなありがとう。」と言い残して車を発進させ去っていった。

遠ざかるナンバープレートには「OHIO（オハイオ）」。楽しい家族旅行であったのだろう。

ニュー Yorker は、普段は知らんぷりを決め込む。大都会ならではの特性でもあり、また世界中から人が集まっているので警戒をする面がある。だが一方では、何かが起こったときは、お節介なくらいに面倒を見ようとする気質も持ち合わせている。たとえ全く役に立たなくても。それがこの街の良いところだ。

## 六 私の息子 (My boy)

仕事をするに当たって、英語のスキルアップは必須であった。英語は好きで、自分なりに勉強はしてきたつもりであったが、いざ赴任してみると決定的に力が不足しているのを痛感した。読み書きは、自分である程度勉強が出来たが、スピーキングとヒアリングは、独力ではどうしようもなかった。そこでやはり、指導を受けようと思い立った。個人ないし少人数レッスンを受けるか、それとも大教室の学校に行くか。結局は前者を選んだ。

赴任した年の四月から、家の近所で少人数レッスンを週一度、土曜日に受け始めたが、先生の都合により二ヶ月で終わってしまった。

そこで、日系のコミュニティ紙の広告欄で新たな教師を探した。二人ほど候補者を見つけた。そのうち一人の方と実際にお会いしたところ、以前、UCLAで文学を専攻し、ずっと作家を目指しているとのこと、また日本人の指導に慣れているとのこと、週二回、勤務時間終了後、職場の会議室をお借りしてレッスンを受け始めた。

ローラ先生の指導法は、テレビドラマやニュースをビデオで見て、それをどこまで聞き取れたかを確認し、日常会話でよく使うイディオムを書き下し、そして意味や背景を解説し、実際に会話してみる、ということを繰り返し行うものだった。先生の発音は美しく、少しづつ力をつけていくことが出来た。

先生はまた、アートにも関心があり、週一度、SOHOのギャラリーに顔を出しているとも言っていた。友人たちと展覧会を開いていることもあった。

ある日、レッスンが終わった後、先生に「今村さん、ご家族の写真、持っている？」と聞かれた。私は迂闊にも持っていなかった。オフィスの机上にも、パスケースにも。「ぜひ、お持ちなさい。その方がいいわ。私も、息子の写真をいつも持ち歩いているの。」

私はちよつと驚いた。プライベートなことも少しは語り合う師弟関係にはあったが、先生の家族のことを深く聞いたことはなかったし、日常の行動や雰囲気から、恋人はいても、結婚している感

じではなかったからだ。

先生はにこにこして「見たい？」と挑発してくる。つまり、「見てちょうだい」と言っているのだ。私は「はい、見せていただけますか？」とお願ひした。先生は、机上においてあった鞆を取り、パスケースを取り出した。どんなお子さんだろうか。ちよつとワクワクした。

先生は見せてくれた。そこには、微笑んだ先生と、笑った顔をしている大きなビーグル犬が、二人で収まった写真があった。「私の息子なの。」ちよつといたずらっ子のような顔をしてクスツと笑った。

レッスンはかなり長続ぎした。教え方は真剣で丁寧であつたし、良質な英語を身につけるため、世の中のさまざまなことについて教えてくれた。また進度に應じた質問をしては、私に独力で答えさせ、その答えに補足をして応用力をつけてくれた。私にとってはとても大きな助けとなつた。

冬になつたある日。珍しく先生に元気がない。事務所のドアを閉め、鍵をかけて高速エレベーターと一緒に降りた。無言である。ワールドトレードセンターを出て、しばらく一緒に歩いた。初めてのことである。どうも話したいことがあるらしい。

途中、交差点で立ち止まつた。堰を切つたように話し始める。行き来する車のクラクションで、時々途切れるが、耳を傾けた。どうも息子さんの体調がずっとよくないらしい。それも、かなり。医

者に診てもらって治療を続けてきたけれども、腫瘍が全身に広がっていて手のほどこしようがない。痛みも強くなつて苦しんでいる。もうこれ以上は、ということ、明日、天国に見送ることにした。恋人がずつとついてくれるが、自分が大丈夫か、自信が持てない。だから、あなたにも話したかった。話すだけなのだけれど。

私は、大丈夫ですよ。と言った。三回、繰り返した。

うっすらと積もり始めた歩道の雪の上に、ローラ先生の涙が零れ落ちた。

もうすぐクリスマスを迎える、マンハッタンの夜の出来事だった。



## 七 フレッシュキルズ (Freshkills)

仕事の一つに、東京から訪れる人々の現地視察の案内があった。依頼を受けると、どのようなことに関心があり、どこを訪問したいか、誰に会いたいのか、何を聞きたいのか、を確認して、滞在日数を勘案しながら、訪問先を探して、お願いをする。

まずは、手紙を書く。レターヘッド入りの正式なものである。これは公文としての意味を持つから、いい加減なことは書けないし、依頼内容を正確に記す必要がある。会ったことのない人であれば、表現にも気をつけないといけない。相手を読んでくれない可能性だってあるのだ。

手紙を送って一週間くらい経って返事がなければ(まず、普通はない。ときおり、親切な人は電話をくれたが。)電話を入れる。これがとても緊張する。本人か、秘書か。辿り着けばひと安心。大概は、アポイントメントを入れてくれる。ここらへんは親切だ。相手方から見れば、受け入れるに当たっては、通常業務を外れ、必要なメンバーのスケジュールを開け、資料も揃えなければいけない。労力を要するのである。これについての感謝は、忘れてはいけない。特に、こちらの資料を持参し、終わったあとは必ず礼状 (Thank you letter) を出す。これらを忘れると、二度目はほぼ無い。

私の在任当時、訪問先として人気があったのは、BID (Business Improving District) であった。

地域の商業の振興、多様な手法によるまちづくりなどについて東京で注目され始めたことも理由であったかもしれない。また、ジュリアーニ政権による、ブラックマンデーで活力を失ったロウーマンハットンの再興のためのIT (information Technology) 産業の振興などにも注目が集まり、調査したいとする方々もいた。

私にとって身近だったのは、やはり清掃行政であったろうか。前職において清掃行政の現場に関わったこともあり、当時のニューヨーク市の清掃行政には注目していた。

ニューヨーク市のごみ埋立処分場は、スタテン島 (Staten Island) にしか残されておらず、そこもほぼ満杯になりつつあった。その後は、他州にごみを「輸出」せざるを得なくなるため、分別とリサイクルには相当力を入れていた。

ニューヨーク市の清掃担当部局は、Department of Sanitation という。東京都の「清掃局」よりはやや守備範囲が広い。ごみの収集と処理のみならず、道路清掃も担当していた。公道上の除雪、さらにヤンキースのワールドシリーズの優勝やスペースシャトルの帰還などの時に行う「ティッカーズパレード (Tickers Parade)」でまき散らされた紙吹雪の始末も担当業務である。

日本からの視察希望者があったときは、先方の担当者は、市役所で話しをするだけでなく、このスタテン島にある埋立処分場、「フレッシュキルズ (Freshkills)」に案内してくれた。やはり、現場

を見ないと話しにならない。土とごみを交互に重ねていく「サンドイッチ工法」も日米共通ならば、上空を舞う海鳥も同じであり、そしてその空気も同じであった。「この空気は、東京の埋立処分場と同じだよ」と現場監督のジミーさんに話しをしたら、とても喜んだ。仲間と認めてくれたようだ。

東京にはないニューヨークらしさを、この処分場で感じたことがあった。ジミーさんが、処分場の一角に連れていってくれた。そこには茶色のサラサラした土が積まれていた。「クリスマスが終わると、生木のツリーがたくさん家庭からごみとして出されてくる。処分するのも大変だし、もったいない。そこで、数年前から、破碎してチップにして発酵させて希望者に無料で配ることにした。良質の堆肥となって、家で植物を育てている市民には好評だ。とても大きなトマトやレタスも育つ。樹木を植物の育成に使うのだから心理的な負担感も減る。」

説明してくれる彼の顔は、誇りに満ちていた。



(上) 埋め立て作業中の重機。海鳥が舞う。(Freshkills)

(下) ツリーを再利用したチップの堆肥 (同上)

## 八 ワールドトレードセンター (World Trade Center)

ワールドトレードセンターは、二つのタワーを中心とする七棟の複合ビルであった。東京都ニューヨーク事務所は、このうちノースタワーと言われる One World Trade Center の七十九階にあった。それなりに広い事務室で、窓からはロワーマンハッタンの夜景や、あるいは遠くリバイ島やエリス島、ガバナーズ島、そして遠くスタテン島を望むことができた。

来客として訪れる人が、地下鉄の駅を出て受付に行くと、名前と訪問先を聞かれる。受付担当者は当該のオフィスに電話をして、この来客を通してよいか尋ねる。OKであれば、運転免許証やパスポートなどを提示して、それを見せると、胸に貼るシール式の入館証をくれる。エレベーター前があるゲートは、地下鉄駅でも見られる「ターンスタイル (turnstile)」となっていて、入る前にゲートキーパーに入館証を見せる。彼らはにこにこしながら「こんにはい！ (How are you doing?)」を連発している。日本語的にいえば「ちわっす！はいはい、どうぞどうぞ、通って通って！」みたいな感じである。思わず笑ってしまう。いかにもニューヨークらしい挨拶だった。

エレベーターは確か七十七階まで高速エレベーターに乗り、そのあと各階止まりのエレベーターかエスカレーターに乗り換えた。この高速エレベーターは、朝方は混む。「駆け込み乗車」も結構目

立った。夏などは、汗をふきふき、大きな人が飛び込んでくるので危ない。飛び込んでくると息が苦しいのか、「Oh boy, oh boy」と連発しているので、思わず回りもクスクス笑っている。

このエレベーターが、時折、止まった。一回目は、出勤時。七十六階辺りで止まった。止まってすぐに、階数のボタンのそばにいるつるつる頭の男が、苛立たしげにインターホンのボタンを拳でドンドン！と叩いた（壊れたらどうするか！と思った）。スピーカー越しにのんびりした声で「どうしました？（What's up?）」と聞こえてくる。こちら側からは「止まったよ！（Stuck）」と言い返している。二〜三分でまだ動き出し、ほっとしたが正直怖かった。二回目は、同僚と一階に降りて外で喫煙（当時は私はスモーカーだった）して、事務室に戻るときだったが、また七十六階辺りで止まった。今度は白い煙のようなものが入り込んでくる。さすがに焦って、今度は私がインターホンのボタンを叩いた（壊れたらどうする、なんて私も考えなかった！）。また「どうしました？」とのんびり返って来たのでつるつる頭の男と同じように「Stuck」と怒鳴った。少ししたら動き出して、ドアが空いた。向こうには係員がいて「大丈夫？（Are you all right?）」とか言うのでよほど大丈夫じゃないよ、と言おうと思ったが面倒くさいのでやめた。

地下や一階にはショッピングモールがあって、大体のものは購入できた。地下には、ラーメン店（喜久蔵ラーメンがあった）と、イタリアンのテイクアウトのお店があった。

ワールドトレードセンターの所有と管理は、ニューヨーク&ニュージャージー・ポートオーソリティ (NY&NJ Port Authority) の不動産部門が担っていた。着任当時、挨拶をした人たちは、紳士淑女で、かつフランクだった。トップの部長は白髪の紳士のウィリアムさん。課長はきびきびとした女性のナンシーさんだった。

このツインタワーの中では金融・不動産関連の企業が活動し、日系の企業も多く入っていた。時折、挨拶や立ち話をすることもあった。

赴任二年目の一九九九年の秋辺りから、東京都の財政難が現地にも伝わってくるようになった。何らかの形で規模の縮小などを覚悟するようになった。年が明けて平成十二年（二〇〇〇年）の一月に、都庁から「今年度末をもって事務所は廃止する」とのお達しがあった。異議を唱えるまでもなく、あっさりと決まってしまった。

引き払うにあたっては、いくつかの大きな課題があった。現地で雇用しているスタッフの身の振り方を決めること。今進行中の事業を完了させること。将来の事業をどう行うか決めること。ニューヨーク市や友好団体にどう説明するか。などなどである。

事務所の賃貸借契約は、五年契約で残りがまだ三年半もあった。賃貸約契約書を熟読すると、借主の都合で途中解約するときは、残りの契約期間の代わりのテナントを借り主が見つけてくるか、

あるいは残り期間の賃借料を全額支払わなければならないとなっている。これは結構きつかった。

また、事務所の閉鎖については、都庁からの指示でまだ公表することも出来ないため、後釜のテナント探しも公に進めることもできない。ずいぶんと無茶な話して腹も立ったが、大家さんのポーターソリテイがずいぶんと協力してくれた。いくつか内覧する企業もあったが、結局後釜を見つけることはできなかった。広さとそれによる賃料がネックになったらしい。

残り期間の賃借料、およそ三年半分の支払いは必至になった。かなりの金額になるので、暗澹たる気分になった。

三月末の退去を目前に、六月末まで残務整理を行うための小ぶりな仮事務所をミッドタウンに見つけ、引っ越しを行った。急なことで困難を極めたが、多くの人達、中でも日本の運送会社が助けてくれたことで、順調に進んだ。

家具を全て始末し、がらんどろになった事務所を改めて眺めた。最後まで残った警視庁の同僚と、掃除機を借りてきて掃除をし、雑巾がけを行った。清掃業者の手配が間に合わなかったのと、最後の掃除は自分たちだけでやりたかった。床も、窓も、水回りも、きれいさっぱりした。気持ちのよい空間になった。

確認のために、担当者に来てもらった。大柄な、気の良い人であった。彼は、空き部屋を見て、尋

ねてきた。「これは誰が掃除したんだい?」「私たちが。」と答えた。

彼はほうっと、心底驚いた様子で、そして感心した表情になった。沢山の称賛の言葉をいただいた。あまりにも多かったのでその言葉を覚えていない。身長一九〇センチのヤンキースファンだった。ジョーといった。

数日後に、そのジョーから、オフィスに来てほしいと連絡があった。事務的な話をしなければならぬ。預託金の返還や残りの家賃の支払いなどなど。まだやることがあった。

改めて、上司のNさんと、ミッドタウンの仮事務所からワールドトレードセンターの彼らのオフィスに行き、話を聞いた。

最初にジョーから説明があった。契約書の条項の確認をした。

次に、退去にあたっての条件提示があった。東京都は長きにわたる友好団体であること。長年にわたり良好な状態で使ってくれたこと。そして退去にあたり、非常に綺麗な状態で原状回復してくれたこと。これらのことを考慮して、残りの家賃を三年半分から一年分に減額すること。

とてもありがたい破格の申し出であった。こちらの努力を認めてくれたことが嬉しかった。

事務的な話が一切終わり、握手をした。今日で彼らともお別れである。最後に、めったに出てこない白髪の紳士が出てきてくれた。部長のウィリアムさんである。もちろん、普段から付き合いのあ

課長のナンシーさんも一緒である。私たちの事務所が閉鎖になることを心から惜しんでくれた。気がつくとき、オフィスの人たちが十数名、全員起立してくれている。ジョーが大きな声でフロアに呼び掛けてくれたのである。「この人たちは、東京都の方たちだ。今日でお別れだが、本当に大切な仕事をこのニューヨークでやり抜いた。彼らは勇者だ。拍手で送り出そう。」

スタンディング・オベーションだ。照れ臭かったが、嬉しかった。涙腺が緩くなりそうだった。しかし、真の勇者は彼らだった。この一年と六か月後、見送ってくれたジョーとナンシーさんは、無事生き延びたが、白髪の紳士のウィリアムさんは、亡くなった。彼らは、テナントを守るために、最後まで全力を尽くしたのである。



在りし日のツインタワー。



(上) 雪の翌日の事務所からの遠景。

(下) 事務所から見えるバッテリーパークシティの夜景。

九 神、扉閉じ給う時、窓開け給う (When God Closes a Door, He Opens a Window.)

少し遡るが、事務所の閉鎖が決まったころの記憶を呼び戻してみたい。

西暦二〇〇〇年、つまり平成十二年は、東京都とニューヨーク市の姉妹都市関係が締結されてから四十周年にあたる年であった。両都市のこの関係は、ニューヨーク市側にとっては、アイゼンハワー大統領が提唱した都市外交戦略の一環であり、東京都側にとっては、東京オリンピックに向かうために必要だった国際関係の強化策でもあった。

昭和三十五年（一九六〇年）の都議会第一定例会では、東龍太郎都知事が「四年後にはオリンピック大会を東京に迎えることになりましたが、それまでにはわが東京を名実ともに国際水準の近代都市として整備することが私の強い念願でございます。また今回皆様のご了承を得まして、ニューヨーク市と姉妹都市の協定を結び、経済と文化の交流をはかりたいと思いましたが、このことも国際都市東京の地位の向上に役立つものと期待しているからであります。」と演説している。

それから続いてきた、最も長い両都市の姉妹都市関係である。共同して、教育・文化のプログラム、都市調査交流などの事業を行ってきた。

また、周年事業もその度に企画し行われてきた。このときは四十周年を目前に、前年の春頃から、

何を行うのかについて、カウンターパートナーである「ニューヨーク市姉妹都市プログラム (The Sister City Program of the City of New York, Inc.)」のメンバーや、関連する団体の人々との会議を重ねてきた。

秋が深まるにつれて、いくつかのプログラム候補案も決まり、四十周年の両都市の首長名による共同宣言の内容も固まっていた。そのころから、東京都の財政が厳しくなってきたことと、ニューヨーク事務所の実業の内容や規模について意見が庁内であがっていることなども聞こえてきた。そうした不安材料はありつつも、ベストを尽くすべく、努力を重ねていた。

新年の一月月上旬には、その年最初の会議の予定が組まれていた。その前日、資料の準備を終えて帰宅した夜、都庁から電話がかかってきた。本庁の課長さんから、三月末をもって事務所の閉鎖が決まったという。詳しいことは続報になるが、新年度の予算査定で、全部予算が切られたことを伝えたかったとのことである。

正直、派遣の人数や、事務所の規模の縮小は覚悟していた。また、それに備えた対応についても調べ始めていた。しかし、一挙にスクラップになることは予想外であった。「根絶やし」だったといってもよい。何から手をつけてよいのか。しかも翌日は会議。多くの団体が集まり、最終確認に向けた段取りを話し合う節目の会議だった。

翌朝、事務所に出勤して、上司のNさんにだけ報告した。ほかのメンバーにはまだ知らせられない。Nさんもとても驚いたが、東京とは時差もありすぐに連絡はとれない。会議は午前中である。とりあえず、この日の会議での対応については任せていただいた。その後のことは、その後のことだ。私は少し早めにでかけた。運がよければ、事前に話ができるかもしれない。

先方のオフィスに着いた。なんとということだ。二十人弱のメンバーのうち、もう半分以上来ている。いつもより皆さん、早い。そして実に楽しそうに話しを始めている。これがなにごともないときであれば、とてもよい雰囲気なのだが。

そのとき、会議室のガラス越しに、プレジデントのテレサさんの姿が見えた。彼女は、レーガン大統領夫人のナンシーさんの秘書で、会計を任されていた実力者で、ジュリアーニ市長も一目置いていた。しかも彼女は、ヨーロッパの都市や、人口で圧倒的な中国の都市以上に、東京都をとっても尊重してくれた。

咄嗟に判断して、部屋を抜け出し、テレサさんを捕まえた。朝の挨拶もそこそこに、大切なお話があるの、会議の前に聞いていただきたいと申し上げた。怪訝な表情はされていたが、私の表情から何かを読み取ったのだろう。部屋から少し離れた廊下の片隅に導かれた。そこで、東京からの連絡の内容について、説明を始めた。会議前なので、時間がなかった。

この四十周年記念事業の主催者は、東京都とニューヨーク市である。私は主催者の片方でありながら、事実を隠したまま、本日の会議を開いてよいのか。参加者を騙すことになるのではないのか。

説明をしているうちに言葉に詰まってしまった私の様子を見て、テレサさんはそっと耳元で「村さん、事情はわかりました。今日の会議は、このまま開きましよう。事務所の閉鎖のことは次回で結構です。」と言った。これで私の心の重しが取れ、いかに楽になったことか。

そして、テレサさんは私の顔をじっと見て「神は扉を一つ閉めるとき、必ず窓を開けてくれるのですよ。(When God Closes a Door, He Opens a Window.)」と言ってくれた。敬虔なキリスト教徒の言葉である。

様々なプレッシャーを感じながら、懸命に働いてきた二年の苦心が、この瞬間に脳裏に甦り、そして一気に胸から噴出するのを感じて、私は不覚にも落涙した。そんな私をテレサさんはそっとハグしてくれた。私にとっては、忘れ得ぬ人の一人となった。

\*\*\*\*\*

その後三月に入り、石原慎太郎知事とジュリアーニ市長の大きな共同宣言書が仕上がった。これはニューヨーク市の好意で、大判の洋紙にエンボス加工して印刷してくれた、立派なものである。

その宣言書を確認してほしいと、ディレクターのヘンリエッタさんから連絡があった。航空便で

やりとりしなければならぬので、時間的な余裕はあまりなかったため急ぎ赴いた。

着いてみると皆さん、優しい。特に、事務所の閉鎖が知られた後は、さらに優しくなった。

出来上がった共同宣言書は、イーゼルの上に掛けられている。やはり十年ごとにしか印刷されない特別誂えのものなので、スタッフ全員、皆で見たいらしい。

と、読んでいるうちに、スペルミスがみつかった。日本人の名前は長く、聞き慣れないので間違いが発生しがちである。周年事業の共同宣言書での名前のスペルミスは、致命的である。このままでは通らない。さりとてやり直しということになると、相手方の仕事になる。大丈夫だろうか？間に合うだろうか？ともあれ、テレサさんに耳打ちした。

彼女は文面に目を走らせると、一瞬のうちに手に取り、えいっと破いて丸めてしまった。「えっ？」一瞬場が凍りついた。その次の瞬間、「大丈夫よ！心配しないで！」とその場にいるメンバー全員に笑って手を振ってくれた。つくづく、器の大きな人だった。

正しいものは、次の日には納品され、その後すぐに市長のサインがされ、東京に送られた。東京からは日本語文に知事の署名がされ、併せて英文のものにも署名がされて、返送されてきた。三月の末までには、両方の書面が全て完結した。

東京都とニューヨーク市の姉妹都市関係は、こうして守られたのである。

# The SISTER CITY PROGRAM

Presents A  
New York City-Tokyo  
40th Anniversary Celebration



and  
A Special Salute to  
the Tokyo Metropolitan Government

Friday, March 10, 2000



## PROGRAM

### Opening Remarks

**Mrs. Theresa E. Behrendt**  
*President, The Sister City Program  
of the City of New York*

### Presentation of Video Commemorating 40 Years of Friendship

### Remarks

**Ambassador Maxwell M. Rabb**  
*Co-Chair Tokyo Advisory Committee*

**Ambassador Takekazu Kawamura**  
*Consulate General of Japan*

**Mrs. Irene R. Halligan**  
*Commissioner, New York City  
Commission for the United Nations,  
Consular Corps and Protocol*

**Mr. Sadahei Kusumoto**  
*President, The Japanese American  
Association of New York, Inc.*

**Mr. Tsutomu Karino**  
*Director General, Japanese Chamber of  
Commerce and Industry New York, Inc.*

### Entertainment

"Blue Eyed Dolls" performed by: **Ms. Sara Binenszok**, soloist  
**Ms. Makiko Hirata**, pianist

### Remarks

**Mr. Robert Lee**  
*Deputy Commissioner, Department of  
Finance, City of New York*

**Mr. John Fava**  
*Former Executive Director, Office of  
Economic Development, City of New York*

**Mr. Manfred Noetzel**  
*Secretary, Staff Management  
Coordination Committee, United Nations*

### Presentation of Proclamation

**Mrs. Theresa E. Behrendt**  
**Mr. Masaharu Nakamura**  
*Chief Representative, Tokyo Metropolitan  
Government, New York Office*

### Remarks

**Ms. Henrietta Lyle**  
*Executive Director, Sister City Program  
of the City of New York*

### Introduction of Family Members of Tokyo Metropolitan Government

**Mr. Yasuo Imamura**  
*Representative, Tokyo Metropolitan  
Government*

### Closing Remarks

**Mr. Masaharu Nakamura**

National Anthems of the United States and Japan

*Intermission*

2000年3月10日、東京都とニューヨーク市姉妹都市プログラムによる40周年記念行事プログラム。

十 お帰りなやう (Welcome back !)

四月からは、人数を縮小して、事務所撤退後の業務承継や、関係機関との連絡体制の再構築と確認、あるいは事務所契約の支払いの清算などの業務を行った。そして五月半ばからやっと、自分自身や家族の身の回りの整理に取り掛かることができた。借上げ住宅に関することに関する細々したことに手間がかかった。いや、そうしたことこそが大切なのだとこのとき痛感した。

このあたりのことであつたらうか。何かの用事で人と面会をした帰り道、ふっと見上げると、高層ビルの谷間に、日の丸が翩翩とひるがえっている。日本の企業が入っているビルであつた。

ニューヨークは、来る前から好きな街であつた。来てからも多くの現地の方々に支えられて、ますます好きになつた。仕事や、暮らしを、無事やり抜くことができたことへの感謝の気持ちでいっぱいだった。このまま住み続けていられたら、どんなに楽しいか、と想像もしてみたりした。

しかしこの日の丸の旗を見て、心を揺さぶられた。自分は、やっぱり日本人なのだと痛感した。そして、日本へ、東京へ、帰りたいと思つた。

平成十二年(二〇〇〇年)六月二十九日、帰任のために、J・F・ケネディ空港で、日本航空のジ

ヤンボに搭乗した。尾翼の鶴の紋章はとても美しかった。  
荷物を棚に入れ、座席に座り、しばし窓から空港の風景を眺めていた。

そのとき「お帰りなさいませ」。

キャビンアテンダントの懐かしい日本語が機内に響いた。

両眼が潤むのを感じた。

あとがき

平成三十年（二〇一八年）四月末から五月初めの連休に、私は、青山侑明治大学名誉教授が主宰する（一社）都市調査会の有志に同行して、ニューヨーク市を訪れる機会を得た。ニューヨーク市都市計画局や、ブルックリンの再開発エリアの企業、団体を訪問し、実地にその動向に接したことは、業務上、研究上、大きな収穫となった。またその際、一行のお許しを得て、懐かしい知人たちとの再会がかなえられた。本文中には出てこないが、ITベンチャーの友人、建築家の友人、そして家族ぐるみでお付き合いさせていた方々などと心ゆくまで語り合うことが出来た。

ニューヨークは、変転極まりない都市であり、無数の人々が世界中から集まり、ここで学び働き、そして全米各地や世界へと再び羽ばたいていく。

そうした中で得られる大切な人間関係が、この街の魅力を数十倍、数百倍にもして、また行きたい、と思わせる原動力にもなっている。この小文集ではそのことを是非記したかった。

結びに、これまで貴重な体験をさせていただいた、東京都の皆様やニューヨーク市の皆様を始めとする全ての皆様に、深く感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

## 著者略歴

昭和 58 年（1983 年）東京都に入都。総務局、建設局、企画審議室、清掃局、東京都ニューヨーク事務所、住宅局、都市整備局などで、最前線の実務に携わる。令和 3 年（2021 年）、定年退職。現在、（公財）東京動物園協会に勤務。令和元年（2019 年）から、明治大学専門職大学院ガバナンス研究科で講師。

主要論文に「超高齢化社会に向かう住宅政策のありかたについて」（2020）、「住宅政策と公共性 ～少子高齢化社会における変容～」(2018)、「ニューヨークと東京」（2002）、「東京の長期的経済政策のあり方 社会資本整備と需要コントロール」(1996)。

## 記憶のなかのニューヨーク

2021 年 9 月 21 日発行

著 者 今村 保雄 ©Yasuo Imamura

連絡先 [yasuo-imamura@mbr.nifty.com](mailto:yasuo-imamura@mbr.nifty.com)

\* 無断転載はお断りします。